

園だより

1月号

令和4年1月11日
新宿区立西戸山幼稚園
園長 佐藤 淳穂



新年あけましておめでとうございます

冬の楽しみ

園長 佐藤 淳穂

穏やかなお正月でスタートした令和4年…と思っていたら、まさかの大雪。一面が真っ白になった園庭に子どもたちがいなかったことが残念でしたが、生まれて初めての雪景色というお子さんもいたのではないのでしょうか。

雪をかぶったプランターでは、ソラマメ、ブロッコリー、ホウレンソウ、スナップエンドウ…など野菜たちが寒さに耐えています。それは子どもたちが種や苗から育てているものですが、暮れにはせっかく出た芽を野鳥に摘ままれてしまい、とても心配しました。鳥たちは、どこかでしっかり見ているらしく、園児が降園すると同時に集まってくるのです。静かな冬休みになったら園庭は間違いなく鳥たちのパラダイスになり、柔らかくておいしい野菜が食べ尽くされてしまうかもしれません。でも、年明けに見てみると、鳥よけネットの中でどうやら命をつないでいました。久しぶりに登園したら、「ぼくたちの畑はどうなったかな」と気にかける子がきつというでしょう。

全員が畑のことを考えていなくてもいいのです。誰かが気付いて、それがじわじわと伝わっていくところに、集団生活の意味があります。「あ、伸びてる。」と誰かが気付いて声を上げ、どうしたどうした、とおもしろがって友達が集まり、「本当だ、大きくなってるね。」と驚きや不思議さを感じ合えたらと願います。そうすることで、最初の感動がもっと大きく膨らみ、好奇心も広がって、友達とのつながりも生まれるのです。

年末の寒い日、築山に霜柱が見つかった時も大騒ぎでした。その大発見はみるみる友達に伝わって、7、8人の子どもたちが次々に氷を見つけ出し、園庭の隅は霜柱で泥だらけになりました。「うわ、大きいぞ。」と30センチくらいの大物を掘り出した子もいました。採掘した氷をバケツや牛乳パックに詰め込んでいましたが、「冷たい！」と長くは持っていられない様子に思わず笑ってしまいました。子どもたちにとって冷蔵庫ではなく自然の中で見つかった氷はどんなに貴重な宝物かということでしょう。いつもの園庭が鉾山みたいに見えました。

Society5.0というAIと共存する新しい社会の中で生きていく子どもたちに今、必要なことは、直接体験であり、人とのつながりです。氷に触れたり、伸びてきた水栽培のヒヤシンスの芽を「割れちゃった」と心配したり、玄関に見立てた積み木の上に上履きを揃えて脱いで家族を感じたり…園で出会う小さな出来事に心を動かしていく毎日を大切に積み重ねていきたいと思えます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

